Japanese association of educational psychology

自主シンポジウム　3

# 教師の成長を考える

企画者　　蘭　千壽（防衛大学校人文科学教室）・ 秋田喜代美（立教大学文学部）
司会者　　中澤　潤（千葉大学教育学部）
話題提供者　浅田　匡（神戸大学発達科学部）・樽木靖夫（横浜市立浦島丘中学校）
鹿毛雅治（慶應義塾大学教職課程センター）・秋田喜代美（立教大学文学部）
伊藤美奈子（お茶の水女子大学生活科学部）
指定討論者　蘭　千壽（防衛大学校）・高橋知己（岩手県葛巻町立小屋瀬小学校）

＜企画主旨＞

本シンポジウムは、専門職としての教師の「成長・発達」をどのようなものとして捉えるのかという発達観と、それを研究する方法論を、教師の成長について実際に今研究をしている者達が事例を提示し議論し合うことによって、理解を深めることをねらいとしている。 このシンポジウムの特色は、小中学校の教師に関して、第１人称の視点として、現職の教師が成長をどのように捉えているのか、また２人称あるいは３人称の視点として大学に籍を置く研究者はどのように捉えるのか、両者の重ねあわせと齟齬を明らかにすることを通して、これからの教師の成長・発達研究の展望を考えるものである。話題提供者として５名、指定討論に２名が名を連ねているが、５人が出す問題を事前に整理することによって、当日はその論点について、フロアの方と共に議論し考えを深めていきたいと考えている。是非、現職の先生方にも参加していただき、自らのこととしてフロアから積極的に発言していただきたい。

＜授業における教師の成長＞

浅田　匡（神戸大学）

教師が成長するということは、何よりもまず「授業がうまくなる」ということであろう。「授業がうまくなる」とは、「よい」授業を行なえる、すなわち何かしら「よい」授業という価値基準が確立していなければならない。したがって、教師にも何かしら理想とする教師像が想定され、その理想に向かって教師が変化（成長）するという暗黙の前提がおかれることになる。

しかしながら、普遍的に「よい」授業というものは存在するのだろうか。実は、「よい」授業ということは、授業に関わっている教師と子どもとの関係によって決定されるのである。そうであるならば、教師の成長とは、教師という職能発達（熟達化した教師としての能力）という一方向の成長を意味するだけではなく、人間的成長という多方向の成長というとらえ方をする必要があるのではないだろうか。

本シンポジウムでは、教職経験２０年以上の経験女性教師による授業設計時における授業予測と子ども理解との関係について報告する。経験教師といえども、教材内容に関してどの子どもがどのような反応をするのかという予測（教材内容に依存した反応）は、２学期になってもほとんど行なえない。つまり、授業における経験は、授業予測を可能にするということはないようである。他方、本読みやノートに書くというような作業レベル（教材内容から独立した反応）は予測可能である。このような授業予測のあり方に現われる教師としての経験ということを、人間的成長の視座に立ちながら、ここでは
考えてみたい。

＜学級経営と教師の成長＞

樽木　靖夫（横浜市立浦島丘中学校）

Ⅰ．指示・命令的な学級経営　学級経営観の変化を考察してみると、教職当初の頃は教師からの伝達が多く、中でも、叱り言葉が多かった。生徒との年齢差が小さく生徒から近寄って来てくれたこともあり、ポジティブな話題は個々に、学級全体には現在よりも細かな校則が存在する時代背景もあり、～をするな式のメッセージが多かった。

Ⅱ．学級成員の特徴に応じた学級経営　仲間関係を重視する彼らの発達的な特徴より、教師からのフィードバックはそれほど効果がないことを経験的に理解し、行動・活動の仕方やなぜそのような行動・活動が必要なのかを伝えるように、伝えるタイミングも待てるようになった。それは、自分が生徒だったらこんなことで叱られるのは嫌だと思う、こんな気持ちが理解してもらえるとうれしいと思うといった生徒に即した観点を持てるようになってきたからだ。

運動の上手な生徒が多い学級で彼らの力がまとまらずに、学級としては成果の上がらなかった運



NII-Electronic Library Service